

共鳴する未来へ 生きることを支える軸に



宮田 裕章氏

慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室 教授

1978年生まれ。東京大学医学部健康科学科卒業。早稲田大学人間科学学術院助手。東京大学大学院医学系研究科 医療品質評価学講座助教。
2009年4月より東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座 准教授
2014年4月より同教授（2015年5月より非常勤）
2015年5月より慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室 教授。2020年12月より大阪大学医学部 招へい教授。厚生労働省参与。日本医師会客員研究員。厚生労働省保健医療 2035 策定懇談会構成員。大阪府 2025年万博基本構想検討会議メンバー。福岡市健康先進都市戦略策定会議メンバー。神奈川県医療プロジェクト顧問。著書：共鳴する未来（河出書房新社）、データ立国論（PHP 新書）

幼稚園の頃は熱帯雨林の近くに住み
多様な環境にもまれて生きてきた
科学者を軸に社会をより良くすることに貢献したいと思った
様々な人達と協力しながら次に繋がるものを創りたいと

リレー 対談

テクノロジーはつながる力 ヘルスケアは病気だけでなく

20歳の頃強烈な感動を受けたモナリザは人類を結ぶ方程式
お金だけではないひとりひとりの「生きる力」が優先される社会に
デジタルの本質の一つはつながる力、
人と人、人と世界は
以前よりもっと素敵に多様な形でつながることのできる



田中 仁氏

株式会社ジンスホールディングス 代表取締役CEO
一般財団法人田中仁財団 代表理事

1963年生まれ 群馬県出身。慶應義塾大学大学院 政策メディア研究科 修士課程修了。1988年有限会社ジェイアイエヌ（現：株式会社ジンスホールディングス）を設立し、2001年アイウェア事業「JINS」を開始。2013年東京証券取引所第一部に上場。2014年群馬県の地域活性化支援のため「田中仁財団」を設立し、起業家支援プロジェクト「群馬イノベーションアワード」「群馬イノベーションスクール」を開始。現在は前橋市中心街の活性化にも携わる。

『モナリザ』も『データ』も
「未来へつなぐ方程式」

田中 私からのリレーのバトンは、慶應義塾大学医学部医療政策・管理学科教室教授の宮田裕章先生にお渡しします。今日はお忙しいところありますが、ありがとうございます。

宮田 宜しくお願ひします。

田中 初めてお会いしたのは今年2月に建築家の藤本壮介氏と映画監督の河瀬直美氏と一緒に、私が再生を手掛けた前橋の白井屋ホテルに来ていただいた時です。

宮田 河瀬さんから「藤本さんの新しい建築ができたから皆で一緒に」と誘われて、これはもう行くべきだろう、と。本来は万博関係のみんで行きたかったのですが、スケジュール調整が困難だったので、とりあえずあきづきが行くという感じで。

田中 藤本氏がお二人を連れてきて下さって、それから親しくさせていただいています。あの時から、街づくりとか白井屋ホテルの話から、割とダイブなお付き合いが始まりました。



宮田裕章氏

宮田 私が一方的にリスペクトしている感じですよ。

田中 とんでもありません、私の方こそリスペクトしています。期間は長くありませんが、非常に密度の高なお付き合いをさせていただいています。宮田さんは、もう、前橋に4泊されていますからね。

宮田 白井屋ホテルは日本の地域の可能性を体現しています。前橋には東京にない地域の強さがあると思います。「都市化」というと「東京ではない部分」をつまんで地域をつくってこざるを得なかったのですが、白井屋ホテルは圧倒的に最先端

ですよ。本当に素晴らしい、そして美しい場所です。それを、まさに情熱をかけて造られた田中さんの志の偉大さに惹かれて、藤本氏をはじめ錚々たるクリエイターの人達が集まってきています。この取り組みは、別分野のクリエイターとしてもすぐリスペクトしていますし、私も微力ながら何か貢献できることがあつたら嬉しいな、と思っています。

田中 とにかく宮田さんは、食事でも空間でも何でも、最適な言語化をして下さいます。自分達には思いつかないような言葉で形容して下さい。一番印象深いのは、ホテルに来

た時に「東京にはない、新しい最先端」と言って下さったことでした。その後、アメリカのインテリア雑誌が、今年1年間に世界でオープンしたホテルから24軒を選んだ中に、白井屋ホテルが入っていて、「他に類を見ない」とあったのです。宮田さんは、まさしく予言したのです。『ナショナルジオグラフィック』から「Congratulations!」と電話がきました。

宮田 本当ですか？ すごいですね。

田中 宮田さんがどういうきっかけで現在の人生をつくってきたのか、どんな子ども時代を過ごされてきたのか、純粹に伺いたいです。

宮田 東京出身と思われている様ですが、実際はいろいろな処に住んでいました。幼稚園の頃はブルネイという発展途上国だけれど石油産出国という場所に住んでいました。次に岐阜に3年程、そして千葉に何年か居て東京の都心に移ってきました。ですから私は「東京代表」ではなく、多様な環境にもまれて生きてきたところもあります。

田中 何故東京大学の医学部に進学

してこの道に至ったのですか？

宮田 ひとつは、高校の頃、歴史の本を読み漁り哲学書をたくさん読んでいた内に、科学者を軸にしながら、社会をより良くすることに貢献したいと思うようになりました。そうすると大学で、ある特定の技能を身につけるだけではなく、文理どちらにとらわれることなく広く学ぼう、そして本を読んでは自分自身がどう社会を見るのか、自分なりのものを見方を磨く中で社会に貢献したいと考えていました。もうひとつ転機になったのが20歳の頃『モナリザ』を見て強烈に感動した経験です。『モナリザ』が何を意味しているのかというのには諸説あつて、もちろん彼（レオナルド・ダ・ヴィンチ）も明確な言葉を遺していないので、全てが「説」でしかありませんが、私が感じたのは、「ダ・ヴィンチの集大成であり、未来へ結ぶ方程式だ」ということでした。超遠近画法とか黄金比とかいろいろなギミックが埋め込まれていることもあつて、「数学者だけがこの絵の美しさが解かる」みたいなことを彼は言っていたのですが、改めてダ・ヴィンチの創作を見

ると、全て『モナリザ』を描く為だけに修練しているのです。超遠近画法の様な形で、あるひとりの人物と対峙するというリアリティがあり、その表情もスマートフォン技術で時間が滞留している様な、微笑まれている様な気分になります。かつそのモチーフも、当初は女神や偉人だったのですが、『モナリザ』は普通の女性で、当時の美の基準に照らしても特別に美しいというわけではない。ただ鑑賞という行為を通して、モナリザと微笑みを結ぶという体験は、まさに人類を結ぶ方程式の様なものだと感じました。これは1千年或いは

人類がこれから1万年の歴史を刻んだとしても、何が普遍的かを考えた時、人が未成熟な状態で生まれて、人と人を結ぶその肯定的な感情は、この文明文化の最も根源的な構成要素になるだろう。この絵画の鑑賞体験というものは、私たちが生きていく上で普遍的に大切なものを表現していると感じます。彼が今生きていたら、多分違うことをやっていたでしょう。一方で私は、彼と同じ事ではできませんが、いろいろな人と協力しながらこうした未来への方程式を描くことはとても重要なことだと感じています。田中さんの前橋での



田中仁氏

取り組みも、私にとつては『モナリザ』の様に、未来へとつなぐ取り組みに感じるわけです。

田中 そうなるのですね。

宮田 次の未来へ結ぶ微笑みの方程式というのか……、おそらく、それはひとりで創るものではなく、いろいろな人と共に創り上げるコミュニケーションなのか、街の形なのか、或いは国かもしれない。今創るとしたら多分違うものになるでしょう。そういう様なものを創りたい、そういうことに貢献したい、それを自分の仕事にしようと思ったのです。

田中 『モナリザ』からそこまで読み解いていくのが、すごいですよ。そうするとやはり、レオナルド・ダ・ヴィンチの様な人というのは憧れなのですか？

宮田 ダ・ヴィンチそのものになりたいとは思いません。多分、こうクリエーションしながら何かをその先に共に遺していく様な仕事をどうしていくのか。それはその時に共鳴する未来とか、ベースの部分は既に描いていて、その当時様々な人と議論しながらの骨格は作ったのですが、「そういう社会になるのかもしれないな

いけれど、テクノロジーで響き合いながらお金を超える新しい価値で社会を動かしていく等というのは、全然分かりません」と言われて、じゃあ自分でやるしかないと思いましたが。本来はビジョンを作る部分にも少しフォークスを置いた仕事というのを考えていたのですが、実際に

いうところに繋がってくるわけですか。

いはシリコンバレーと中国の後ろにいたというところとは否めませんね。シリコンバレーでは西海岸という余白を使い、中国は国そのものを伸びしろとして一気にデジタルを取り入れました。日本はデ

社会を動かし、人々を変えていくという説得力とセットじゃないと未来も現実も動かないということも、その時強く感じました。今、日本が一番必要としていて、今後世界でもより重要になる分野。お金よりも大切な価値で既に駆動している分野。この2つの条件に当てはまるのが医療であり、まずは医療分野から始めようと思えました。その当時の経済界は「Green is Good」の様な世界観だったので。

宮田 その時に、医療で何か具体的なものをしつかりコミットしながら、未来のビジョンを作っていくというのが、遠回りに見えて最短なのかなと、医学部に進みました。

デジタル競争力ランキング世界27位とかで遅れているのは間違いないです。だからといって全てネガティブかというところでありません。ひとつは昭和で成功し過ぎた高度経済成長モデルの様に、FAXやテレビの普及を器用に30年間運用してきたのです。それで何とか回っている感じの30年間というのがあったと思いますが、今回のコロナで多くの人が、シリコンバレーや中国の後を追いかけるより、その先の未来に一気に進む重要な時期なのではないか、と徹底的に気づいたという気がします。

田中 「貪欲で何が悪い」みたいな文化でしたね。

田中 よく「日本はデジタル後進国だ」と言われますが、それについてどう思われますか？

宮田 確かに「平成の失われた30年」と言われますが、特にこの15年ぐら

田中 それで「やはりデータだ」と

田中 よく「日本はデジタル後進国だ」と言われますが、それについてどう思われますか？

田中 この「デジタル社会」というのは、結局データとAI活用というところですよ。でもアメリカはGAFAMの様な大企業がデータを握っています。中国は国家がデータを握っています。日本はデータも少なく、データ

田中 「貪欲で何が悪い」みたいな文化でしたね。

田中 よく「日本はデジタル後進国だ」と言われますが、それについてどう思われますか？

田中 この「デジタル社会」というのは、結局データとAI活用というところですよ。でもアメリカはGAFAMの様な大企業がデータを握っています。中国は国家がデータを握っています。日本はデータも少なく、データ

田中 それで「やはりデータだ」と

田中 よく「日本はデジタル後進国だ」と言われますが、それについてどう思われますか？

田中 この「デジタル社会」というのは、結局データとAI活用というところですよ。でもアメリカはGAFAMの様な大企業がデータを握っています。中国は国家がデータを握っています。日本はデータも少なく、データ

データの活用によって
医療と「健康」のあり方を変える



宮田氏の著書

に対して非常に国民もセンチティブです。そんな状況で、どう次の優位性を持つことができるのかちよっと不安ですね。

宮田 シリコンバレーと中国はま

田中 この「デジタル社会」というのは、結局データとAI活用というところですよ。でもアメリカはGAFAMの様な大企業がデータを握っています。中国は国家がデータを握っています。日本はデータも少なく、データ

田中 よく「日本はデジタル後進国だ」と言われますが、それについてどう思われますか？

1人より良い治療が受けられる。最近の成功例がワクチンです。通常であれば3、4年かかるものが共有によって9か月で成功しました。この「共有しながら新しい価値を創る」ことができれば、日本としては、今までの「奪い合い型」とは違う社会のあり方になっていくのではないかと思いますね。

田中 なるほど。

宮田 今、経済フォーラムでも議論していますが、日本だけで成長し豊かになるのではなく、EUやインドも巻き込みながら流れを作って世界と一緒にやっていく。「Made in Japan」ではなく「Made with Japan」みたいな処に、勝機があるのかなという気がします。

田中 先日、中国に近いあるアジアの国が、データが入ったサーバーをどこに置きたいかと言った時に、中国ではなく日本というニーズがあると聞きました。そういう意味で日本はアジアでかなり信頼されていますね。

宮田 戦後ずっと築いてきた平和国とか、時には「玉虫色」と揶揄され

ることもありましたが、このデータ社会におけるニュートラルなポジションとしては、一定の優位性はあるでしょうね。

田中 医療は今後どの様に変わっていくのでしょうか。

宮田 アップル社が既に「ヘルスケアに両足を突っ込んでいく」と宣言をしました。医療は、自戒を込めて言えば、今までは病気になることで進行して高度な治療をする、つまり病院に来てから始まるものでした。そこに現在の日本は40兆円というお金を使っていますが、実は健康な時から人々と繋がることのできるようになったのです。例えば「フレイル」という指標があつて、それが進行すると認知症になったり歩けなくなったりします。それをもっと手前から歩行速度を測りながら伝えられれば、その人が元気に生きられる時間はもっと長くなってくる筈です。今はスマートフォンで常時繋がっているのも、もっと手前で支援が必要なタイミンが判ってくる。そうになると、医療という市場ではなくヘルスケアという800兆円ぐらいの市場になると言われて、更に今

後は「生きること全てを支える」までに広がっていきます。そうなった時に、ヘルスケアというものをどのタイミングで使えばいいかリンクされてきて、医療が、生きること全てを支えていく様なひとつの軸になっていくのではないのでしょうか。これまでは人生に於いて「医療が必要な時」が局所的にあるだけでしたが、常に医療と繋がりがながら生活が支えられ、もっと充実した生活が送れる様になるのかな、と。

田中 一方、医療費の問題でよく言われるのは「サポートすることが本当に医療費削減に繋がるのか」というところです。

宮田 世界にはいろいろなエビデンスがありますね。日本でも2年前に予防が効くか効かないかの二元論での議論がありました。世の中には効く予防と効かない予防があるというのが真実です。健康目的で生きていく人ってそんなにいないです。80歳を超えても山登りをしたい人と若者との会話を楽しみたい人は、異なるステータスの健康が必要なのです。自分が楽しく充実して、生きがいを持って生きるには何が必要なの

か。その人の生き方を支える手段として健康がどうあるべきか、ですし、更に歩行速度が秒速1を下回ると死亡率が一気に上がるのです。今までの予防とは前提条件が全く違って、更に手前の秒速1.7か1.8ぐらいからサポートすると、よりその人自身の力で健康になることができるのです。

田中 その時のサポートというのは、歩き方などを意識することなですか？

宮田 「もう少し歩いてみましょう」等でもいいかもしれませんが、具合の悪い所を少しサポートするだけでも歩くことが楽しくなる可能性があります。あるいは社会的な繋がりがなくて歩くことそのものを躊躇している場合もあるかもしれません。手前でサポートすることで、状況は画的的に変わらと思います。本当に厳しくなつてから食事制限をするよりは、適度な量の美味しいものを普段から食べていて、自然に健康になれる方が魅力的に映る人は多いでしょう。

田中 そういったデータ活用社会になると、良いことが多くなると思

ますが、反対に、考えられるリスクにはどんなものがありますか。

宮田 「監視社会」ですね。隣国ではそれがもう先鋭化していると思います。国が全てを握ってコントロールするというのは確かに監視社会の入口ですが、そうではなくて我々が権利として適切な時に自分達でコントロールして使える状況にしていけることが大切です。EUでは実際に「Right to Access」という権利が確立されました。このように人々が平等にデータにアクセスする権利を基本的人権として掲げ始めたことによつて、GAFAMも変わり始めています。世界も、既にいろいろな未来を見始めていると思いますよ。

田中 そういう中で宮田さんが見ている未来社会は、どんな風になっているのでしょうか。

宮田 これまで文明がどう作られてきたかという、治水事業が始まりのひとつです。「1人では出来ない事を皆でしよう」というところにコミュニティが生まれ、秩序というか国が生まれて、その時まとめ上げていくのが王の権力というような共同

幻想が最初の力になりました。しかし

定言命法的に定められた力は間違つた時、例えばベストが来たりいろんな苦難にさらされると悲劇がさまざまいわけです。そして科学が発達し次に「経済こそ全て」という産業革命以降の秩序がきます。ひとりひとりが経済活動というもののいかに貢献するかという軸の中で生きる。好むと好まざるとに関わらず、そういう仕組みになってきました。しかし、ここからはむしろお金だけではない様々な価値が共有されることによつて、ひとりひとりの「生きる」ということが先にくるような社会になると考えています。どう生きたいのか、どう社会に関わっていきたいのか、貢献していききたいのか、我々が主体的に世界との関わりを選択して、それを表現して創っていく様なコミュニティがあり得るのではないかと思っています。まさに田中さんの生き方が未来のひとつの形だと感じています。お金の所有だけではなく、未来に貢献するためのロールモデルとしての生き方で、本当に素晴らしいなと思います。

田中 ありがとうございます。共創

の社会づくりですよ。

宮田 これまでは、生まれた国のセットメニューみたいなもので決められてきました。しかしこれからは多層的に世界と繋がることによつて、もう少ししなやかで多様な豊かさがあつてもいいのでは、と思つています。

田中 これからは自分自身が「どう生きたいか」をもう少し明確にしていかなないと、考えておられる様な新しい時代の医療を使うことは出来ないうことでしょうか。

宮田 ひとりひとりが哲学者たれという話ではありません。食べることひとつとっても世界と繋がっています。最近のウイグルの話とか、カーボンニュートラルでレジ袋をもらうかどうか、食べること自体の豊かさ、文化的な体験だけではなく、必要な栄養素を自分の身体に摂るという健康面、それが過剰になると病気になる、或いはフードロスを生みだせる環境に対する影響があり、地産地消のビジネスにも貢献する、と……。だから、「生きる」ということは、好むと好まざるとに関わらず繋がっているのです。「繋がって

る未来」は、もう既に一部の人々には

見えているけど、もっと見える様になつてくるので、選ぶ時に何を大事にしたいのかを考えるだけでも変わってきます。更にポジティブな未来の可能性としては、これからの社会を担う「Z世代」はもう繋がっているの、何が正しいかということも良く考えながら生きています。彼らの切り拓く未来にすごく可能性を感じていますし、応援をしてゆくの私の役割のひとつでもあるかなと思つています。

「遠隔」という選択肢と「場所」の持つ力の活用

田中 教室であるこの部屋のコンセプトをお伺いしたいのですが。

宮田 「お母さんのお腹の中にある様な」そういうコンセプトでつくっています。この部屋にもある程度刺激はもちろんありますが、ゲストの方にリラックスしていただきながら、お話をすることを中心としています。このソファは深く座つてゆつくり寛げるものにしつつ、部屋全体も球体のような形にしていま



す。そして大事な要素の観葉植物、これがあるだけで全然気分が違ってきます。

田中 ゆつたりと安心できる場所ということですね。先程ちょっと見せていただいた美術館的な別のお部屋はどのようなコンセプトですか？

宮田 迷路の様な鏡の部屋、あちらはまさに道を探る若手研究者のための「探求の部屋」です。あそこで道を探しながら時には自分を省みて、

という形ですね。

田中 自分の姿が映りますからね。

宮田 やはり多様な物の見方が必要なので、多面的な構造が映ることによって、何かに囚われることなく見ることができるようになるかな、と。私は確認していませんが、日没になると光の反射がひとつの方向に行けなく道も拓けるだろうと「探索」と「多様性」、「多面性」をモチーフにした部屋になっています。

田中 あの部屋で若手研究者達とディスカッションをされたりするのですか？

宮田 そうですね、はい。

田中 効果はあるのでしょうか。

宮田 場所とか内装というのは、そこに来ただけで感じるものがあるのです。その場所が持っている力を言葉として示さなくても、その場所の高揚感やそこから感じるフィードバックが底上げされた状態で対話が始まると、やはり違うものが生まれてきます。ただベースとして、特にコロナで大抵

の事が遠隔で済む様になってきた今、フィジカルで集まる意味を考えると、やはり場所というのはすごく大事です。かつて以上に、機能面ではもう遠隔が圧倒し始めているので、そうやってくるとやはり、フィジカルだからこそ持つ雰囲気、より一層重要になってきます。例えば、ただ「泊まる」というだけではなく、白井屋ホテルが持っているとても美しい体験が、より価値を持つように。

田中 もうひとつ奥の、板で底上げされている部屋も不思議ですね。

宮田 あそこは最初につくった部屋で、アイデアを引き出す様な少人数の会議の時に使っています。一応「教室」という名前ですが、教室としては使っていませんし、デジタル化しているので本は1冊もありません。相反するものでもアウフヘーベンして、先に進んでいこうというコンセプトです。それは自然と機械的なもの、工業的なもの、或いはあの場所自体が築93年以上の歴史があるので、最先端の技術等も採り入れていくことだったり、規則的なものと不規則的なものを組み合わせさせてみたり……。相反するもの

中でのイノベーションというのが、あの部屋のコンセプトです。

田中 その発想というのはどこから出てきたのですか？ 幼い頃から生活をしてきた中で自然に培われたものですか？

宮田 難しいところですが、ひとりだけでは絶対に醸成されないと思います。やはりこの1年、田中さんはじめ藤本壮介氏、河瀬直美氏のお三方との出会いは、私の人生にとって大切な出来事です。まさにこれがリレー対談の醍醐味だと思いますが、自分とは又違う視点で世の中を見て生きてこられた方から、志や考え方を伺うとすごく刺激になりますし、一歩前に進む力になります。こういうことが重なってきて、つくられてきているのだと思います。

田中 現在、コロナでいろいろと制限されることが長く続いて、対面ではない形で話すことが増え、それが当たり前になっていますが、これが就職した後も続くのでは、人との繋がりが変わるのではないかと、又直接会うことの重要性もあるでしょうし、そのあたりはどうお考えですか？

宮田 それは間違いなく変わるでしょうね。日本はその点でも遅れてしまいました。日本でもアメリカでもテレワークが導入されましたが、テレワークに関するとらえ方は全く異なります。アメリカでは85%の人が「悪くない」と考えていて、内訳は4割が「今までより全然良かった」と言い、「今までと全然変わらな」という人が残りの4割、「対面の方がいい」と言っている人は15%でしたが、日本では「対面の方がいい」という人が8割なのです。

田中 そんなに違うのですか。

宮田 部屋が狭くてテレワークに向かないとか、いろいろあるでしょうが、この段階で結構厳しいですよ。

田中 差がつかますね。

宮田 対面と遠隔を比較すると、もちろん対面のフィードバックの方がいいところもありますが、大事なのはデジタルという選択肢が入ったことよって今までとどう違う事ができるのか、ということなのです。日本の教育にも導入がなかなか進まなくて「やはり対面教育だ」と言っている人達もいるのですが、いわゆる3密の空間に子ども達を押し込み、詰



対談を終えて

め込み授業をするのが本当によいか、という問いから始める必要があります。ひとりひとりに合わせた学習進捗、オンデマンドで教えるツールがもう世界中でできているのです。厳密に言えば、皆に合わせるということはあり得ないのですが、上に合わせるのと下の子が解らないし、下に合わせると上の子の時間は無駄になります。でもひとりひとりに合わせる、得意な子はサッサとやって他の苦手な事に時間を使って、圧倒的に効率がいい、という考え方になってきています。じゃあ、教師は必要な

いかというところではありません。今までやるべきだったけれどできなかった事、子ども達ひとりひとりに向き合い、その子達が将来豊かに生きるためにはどういう学びの選択肢を習得すると可能性が広がるのかな、そのコーチングこそアナログでやるべきことだろう、と。デジタルという選択肢を手に入れたことで、以前よりもっと素敵にするということと一緒に考えるのが大事なかなと思います。

田中 文部科学省の考え方というのはどうでしょう。学習指導要領が岩盤になってなかなか難しいですが、

我々はその岩盤を撤廃して、子ども達が個別最適化の授業が受けられる様、そういう新しい教育を前橋はやるぞ、と、現在取り組んでいるところですよ。

宮田 素晴らしい、最高ですね。それは前橋として出来るのですか？

田中 それがスーパーシティの鍵で、そのためにスーパースティに手を挙げています。

宮田 何とか成功してほしいですね。

お金に変わる 新しい共同幻想

田中 先生のお話をうかがっていると、いろいろな意味で「価値観」というのが基盤にあつて、人がぶつかり合ったり、或いは共有してみたりということがあるわけですね。例えば「兌換紙幣」というものが兌換ではなくなったりというように、価値観そのものの根底が揺らいできて、人と人との接点がもうフィジカルではないところまでいってしまったという、その「価値観」の未来像というのはどういうものだとお考えです

か？

宮田 悪い言葉だと「共同幻想」ですが「価値観」の方が上品なので価値観と言いますが、宗教ニューtralに言うとかつては「神」という概念だったわけです。そこで上位概念の価値観をボンと作る、それが「王」とかで、そういう封建制度というピラミッド型の仕組みを作って上から落とす方法が価値の源泉で、それが当時は一番効率的で、そういうコミュニティが競争で勝っていたわけですね。でもそれがグラグラと揺らされた後に台頭してきたのが経済という新しいパワーで、それによって人々をまとめ上げていくコミュニティでした。特に産業革命以降は経済を成立させていくための国があり、或いは巨大企業等が紐づきながら「価値」が出来、動いてきた。多くの人は「お金が全てではない」と言いますが、貨幣は強力なコミュニケーションツールです。でも愛とか正義は共有できないので、結局共有できる所世の中がぐるぐる動いていったのです。これが今まさにデータという形でお金を介さずに直接共有できる様になり始めてい

ます。中国がいいとは言いませんが、「信用スコア」というのがあって、例えばいいことをしたらポイントが貯まって「休暇中に実家に帰る」等、不思議なポイントがいろいろあります。お金を持っていてもいい学校に入れないけれど、信用が高い人はいい学校に入れるという現象が始まっています。これはもう、お金を超え始めていると言えます。一元的に国家だけがつくるとそれは監視社会になるかも知れませんが、それが例えば前橋モデルで「前橋はここを大事にします」とか、あるいは会津若松モデルではここを大事にしますとか、コミュニティによって価値観のバランスが違って、ここは環境に重きを置くとか、教育に重きを置くとか、健康コードに重きを置く等、様々あっていいと思います。多様な形で共有する価値を我々がシェアできる様になってきているので、コミュニティや社会を動かしていくところ、ボトムアップで社会を創っていく可能性があるのではいかなと思います。

田中 不変ではないぞ、ということですよ。

宮田 シェアードバリエーションの先駆けとして我々が目の当たりにしているのがSDGsです。あれはまさに新しいタイプの共同幻想で、カーボンニュートラルという湧き上がってきたものに右往左往していますが、あれはそんなに美しいことだけではなくて、欧州がグリーンエコノミーで成長させるために、それを後押しするためのイデオロギーとして仕組まれたものなのです。今大事なのは実はカーボンニュートラルではなくて「持続可能な未来」なのです。「持続可能な未来」という共有価値の中で、人権や健康等いろいろなものがある、環境というのはワン・オブ・ゼムだ、と。だから日本がやるべきことはカーボンニュートラルに反対とか賛成とかではなくて、もつと新しい魅力的な未来を創ることです。その為には、カーボンニュートラルより魅力的なグローバルアジェンダをつくっていかないと駄目です。こうして考えると、そうした未来のモデルケースとして「新しい未来はこれだ！」という姿を見せるのが前橋であるともいえますね。

田中 頑張りましょう。前橋の責任は重大ですね。

宮田 田中さんの覚悟と志は、本当にリスペクトしています。

田中 皆さんが協力して下さるので……。

宮田 そういうモデルケースが、いろんな所で出てくる様になってほいすね。前橋でそれが成功し、いろんな所に共鳴させていけば世界を変えられると思っています。

田中 例えば、会津が医療を変える、とかですよ。どこかひとつ特色を出していけばあとは横展開していいいのですからね。

宮田 全部で成功する必要はなく、それぞれが重点ポイントをやっていく。1回成功したものはコピーし易いので、共有しながらまたアップグレードしたり、アップデートしたりしていけばいいと思います。大事なのは「お上ありき」というより、もう我々は民の力で出来る事をやっていくということです。

田中 今日は貴重なお話をありがとうございました。

宮田 こちらこそありがとうございました。